

アメリカとスイスの国語教育

——ホイット、テストュー両氏にきく——

はじめに

諸外国における国語教育の歴史と現状をとらえることは、それが重要であることはわかかっていても、なにかと困難なことが多い。ここに掲げるのは、外国の国語教育をとらえる一方法・一段階として、外国人に、直接、自分の受けてきた国語教育を語ってもらい、こちらからも質問して、外国の国語教育の一端をうかがおうとしたものである。

この企画と実施は、昭和三十五年度広島大学大学院教育学研究科教科教育第一講座「国語科教育調査実習」(野地潤家先生担当)の一環としてなされた。実施の期日および講師はつきのとおりである。

第一回 昭和35・6・24(金) 広島アメリカ文化センター館長

James Hoyt

第二回 昭和35・12・16(金) ジュネーブ大学教授 Prof. Dr.

Michel Testuz

ホイット氏は、カリフォルニアの出身で Venessa Elementary

School, John Burroughs Junior High School, Lord Fairfax

High School を経て、カリフォルニア大学、ミシガン大学を卒業、その後フランス、日本に留学し、帰国後さらにカリフォルニア大学大学院で研究を続けられた。一九五四年、外交官となり、インドネシア・朝鮮・フィリピンなどに駐在し、一九五九年、広島アメリカ文化センター館長として来日された。ホイット氏の専攻は、日本文学および東洋学である。

テストュー氏は、スイスのジュネーブ湖のほとりに生まれた。専攻はアラビア文学で、ジュネーブ大学の教授である。当時、北鮮帰還問題の解決のために、赤十字国際委員会駐日代表団の一員として来日されていた。十一ヶ国語に通じておられるそうで、母国語はフランス語であるが、この時は英語でお話しいただいた。

両氏とも、公務ご多忙の折にもかかわらず、わたくしどもをお願いを快くお引き受けいただき、貴重なお話をしていただいたことに、心から感謝申し上げます。なお、テストュー氏の通訳をしていただいた大友氏にも、深くお礼を申しあげるものである。

(文責 大槻和夫)

I アメリカの国語教育

アメリカの教育の特色の一つは、ヴァラエティに富んでいることにあると思います。つまり、教育の制度・内容・方法などが、洲によって、また地方によって、非常にちがっているということです。

ですから、アメリカの国語教育について語るばあいも、これを一般化してうんぬんすることはきわめて困難です。それに、わたしはその方面の専門家ではありませんから、くわしいことを申しあげることもできません。こんなわけで、これから申しあげることも、わたしの受けてきた国語教育の回想にすぎないことをおことわりしておきます。なお、ここでは、主として高校における国語教育についてお話しすることにしたと思います。

高校の一年では、世界史と世界文学を、同じ先生に、平行して教わりました。世界文学では、ギリシア・ローマの詩、聖書文学、民族文学、英国の小説、ヴィクトル・ユゴーといった世界的文豪の作品など、いわば世界文学の古典ともいふべきものを紹介してもらいました。こうした古典は、たくさんのりっぱな訳本がありますから、その名訳が集められて教科書になっており、それを学んだわけです。

二年では、ヨーロッパ史とヨーロッパ文学を、一年の時と同じように平行して学習しました。ドン・キホーテなどのヨーロッパ文学の古典の紹介をうけたわけです。

三年では、アメリカ史とアメリカ文学を学びました。カリフォルニア州の規則できめられていたのだからと思うのですが、高校四

年間のうち、少なくとも一年間はアメリカ史とアメリカ文学をやらなければならぬことになっていました。また、郷土の文学——わたしのばあいはカリフォルニアの文学ですが——も、やらなければなりませんでした。

このように、高校三年までは、地理的には広いところから狭いところへ、読み方としては浅い読みから深い読みへと進んできたと言えるでしょう。

また、高校三年になると、進学希望者には、大学入試に備えるための高等作文 (advanced composition) がありました。文法は、主としてこの作文の中で扱われました。

四年になると、これまでとちがって、英語は選択になります。

文科系に進む者は、もう一年間英語をやるのが望ましいということでした。科目としては、「現代文学」「英文学」「世界文学」の三つがあり、能力の低いものは「現代文学」を、高いものは「世界文学」をとるようになっていました。「現代文学」の教材には、読みやすいもので、その人の将来に役立つものがえらばれていました。「世界文学」のテキストには、抄本ではなく、一冊のまとまったものが使われていました。たとえば、マルクスの「資本論」、アダム・スミスの「国富論」、ミルトンの「失楽園」といったもので、もちろん英訳によるわけです。

大学は、わたしのばあい、文理科大学 (College of letters and science) なのですが、ここでは、文科系の人でも理科系の人でもいっしょに学びました。日本とちがって、アメリカでは、文科系の人でもそうとう理科系の勉強をしますし、逆に理科系の人でも文科系

の講義をきいておりました。大学では、一年間は英語が必修になっております。この英語をやるためには、試験に合格しなければなりません。この試験には、約三分の一の学生が不合格になっていましたから、試験としてはそうとうきびしいものだと言えるでしょう。この試験に不合格になった人は、予備校で、いわゆる *Dore Head English* をやらなければなりません。その内容は、高校程度の作文です。

以上が、わたしの受けてきた国語教育のあらましですが、つぎに、高校の国語教育について、もう少しくわしくお話してみようと思います。

△話すこと▽

アメリカ人は非常に議論好きで、小学生のころから政治問題の議論をさかんにやります。おもしろいのは、学校の行き帰りの議論で、行くときはAとBとがそれぞれの立場で議論をし、帰りには同じ二人が立場を逆にして議論したりすることです。このように、アメリカ人は、小さいときから、一つの趣味として論戦します。高校になると、*debate club* があって、これにほとんど全員が入会します。一般に、アメリカの学校では、クラブ活動がさかんですが、*debate club* でも、熱心に活動しています。討論会では、宗教問題や政治問題がとりあげられますが、生徒の身近な問題もとりあげられます。討論会の形式は、二つのグループに分かれて討論し二、三人の先生に判定と講評をお願いするというやりかたになっていました。先生は、テーマのとりえかた、発想のしかた、論の展開のさせかたなどに重点をおいて、批評されました。わたしもこのクラブにはいりましたが、そのときにとりあげられた問題は、たとえば、

エチオピア問題、フランス戦争、ファッションズム、医学問題、「カトリック信者が大統領になってもよいか」という問題など、当時のトピックが多かったと思います。そのほかに、「女学生は何歳から夜のダンスパーティーに行ってもよいか」というような身近な問題もありました。今から考えると、政治問題などのばあいは、結局借りものの意見であって、ほんとうに生徒が考え出した意見をたたかわすということになると、身近な問題の方がよかったと思います。

なお、クラブ活動としては、*literary society* があって、創作や雑誌の発行などをやっておりました、
△読むこと▽

教科書やそのおもな内容についてはすでに申しましたとおりですが、このほかに、一年間に六七冊の本を家庭で読んで感想を書くという宿題もありました。

学校では、一学期に二つ三つの作品を読むわけですが、この作品は、抄出のばあいと、全作品のばあいとがあります。学習活動は、そうとう多方面にわたってしました。たとえば、二年生で「二都物語」を読んだのですが、そのときには、先生の朗読や内容の討議のほかに、ギロチンの模型を作ったり、対話をやったり、仮装舞台を作ったりしました。詩などは、暗誦もさせられました。それらは、いまでも覚えていのがあります。また、同じ「二都物語」をとりあげるにしても、二年のときと四年のときとは、その目的がちがっていきまして、扱いても同様でなかったこともちろんです。二年のときは、作品を読み味わうか、作文を書く力などをつけるのが目的だったのですが、四年になると、もっと知識的な要素が強くなります。それから、社会科学と関連をもつて学ぶわけですから、アメリカの市

民精神 (civica) を養うことも目的になっていたと思ます。

△書くこと▽

大入学試の作文は、英語を正しく書く力があるかどうかをみるためのものでした。したがって、その題目も、知識よりも書く力をためすのにつごうのよいものが出されました。生徒が興味をもちそうな題目がいくつか出されて、そのうちからどれか一つを選んで書くわけです。題目が文学にかたよるようなこともありません。

作文の授業は、ところによつてはテキストを使ってやっていたかもしれませんが、わたしのところはテキストなしでした。「作文は作文することによつて学ぶ」という考えかたです。この作文によつて、文法的な誤りをなおしてもらったりするわけですが、だからといって文法的なテキストを使うわけではないのです。一段に、アメリカでは、Grammar ということばをあまり使いません。Grammar という、なんだかむずかしくてとりつきにくいもの、おもしろくないものと考えられがちで、役に立たないとして敬遠されがちでした。こんなわけで、文法的なことは、作文の中で指導していただきました。

そのほか、英語では綴字法がむずかしいので、その練習もいたしました。これは、おもに小学校でやるわけですが、その方法としておもしろかったものに「綴字競争」(spelling bee) があります。これは、二つのチームにわかれて、先生の言われる単語をまちがいなく書く競走です。まず A チームの人がとりかかりますが、正しく書ければ一点として、まちがうところまでやります。まちがうと、こんどは B チームの番になり、これもまちがうまでやって、その得点を数え、勝ち負けをきめます。この競争は、おもしろいので、おとなでもベテニーなどでよくやります。

△文法▽

文法については、作文のところでもふれましたように、主として作文を通して学びました。もつとも、小学校の六年ごろから、名詞が何であるかというようなことはならいしました。というのも、やはり文法の学習があまり役に立たないからでしょう。正しく読み書きできるのに必要な程度において、必要が生じたばいかに教わるということだったと思います。

文法は、むしろ外国語学習を通して学びました。外国語学習は、高校の一年からはじまります。外国語の学習には、どうしても文法を学ぶ必要がありますので、ここではいろいろ学びました。

それから、日本では古典を読むために文語文法を学ぶ必要があり、そこにいろいろ問題があるようですが、アメリカにはこれに相当する問題はほとんどありません。シェークスピアだって、近松ほどわかりにくくはありません。わからないところがあれば、辞書や参考書で調べれば済みます。それに、イギリスの古い文学は国文学にはいらぬという気がします。チャールサーやジョンソンなども、四年の選科科目までは出てまいりません。また、古典文学に対する価値観も、日本とはちがうようです。日本では、平安時代の文学が日本文学の黄金時代だったとも考えられるほどですが、アメリカでは、イギリス文学でも十九世紀以後、アメリカ文学では現代というわけですから、古典文学はそれほど問題にならないのです。こんなわけで、日本の文語文法のような問題は、アメリカではあまりないと言つてよいでしょう。

アメリカの国語教育研究団体

ます、全国的なものとして、

○National Congress of Teachers of English (NCTE)

がおります。このからは、English Journal を出してあります。

そのほか、

○American Teachers Association

○American Philological Association

○American Federation of Teachers

○Modern Language Association

などがあり、それぞれ雑誌や出版物を刊行してあります。これらのうち、Modern Language Associationは、外国語を中心としたものですが、なかに英語もはいつています。

そのほか、地方地方でいろいろ研究会があることはいうまでもありません。たとえば、

○New England Association of Teachers of English

などは、ニュー・イングランド地方の研究会です。これらからもいろいろ出版されているはずですが、くわしいことは知りません。

なお、くわしいことを知りたいときは、アメリカ文化センターにご相談ください。

I スイスの国語教育

ミシエル・テストュー

スイスの国語教育について話をするようにということですが、初対面のこととて、みなさんがどういうことを求めておられるか存じませんし、また、わたしはその方の専門家ではありませんので、とても話にくいのです。それに、つぎの三つの理由で、スイスの国語教育を全体としてお話しすることはとてもむずかしいように思ひ

ます。すなわち、第一に、スイスは二十五州に分かれていて、それぞれ州によって教育の事情がちがっているということ、第二に、一つの統一的な国語をもっていないということ、第三に、宗教的な事情が複雑であり、教育にもそれが反映しているということ、この三つです。この三つのがらは、それぞれスイスの教育を規定していますので、まずはじめに、これら三つの点についてお話ししておきたいと思ひます。

スイスの面積は九州ぐらいしかありませんが、州は二十五にも分かれてあります。しかも、教育法規は、これらの州によって、それぞれ異なっております。もつとも、スイス全体を規制している一つの基本法はあります。しかし、この基本法に定められているのは、七歳から十六歳までは教育を受けなければならないという義務教育の規定だけなのです。この基本法は、一八四八年にできました。各州は、この基本法にもとづいて、さまざまな教育法規を定めています。したがって、スイスの教育は、州によっていろいろとちがっており、画一的に論じることができません。

また、スイスには、一つの統一的な国語というものがありません。スイスで用いられていることばは、おもなものだけで三種類、小さなものも入れると四種類あります。すなわち、フランス語、ドイツ語、イタリア語、それにごく一部の人々によって用いられているロマンス語——この四種類です。フランス語は、スイスの西部——フランス、オランダに接している地方で、ドイツ語は、東北部——ドイツ、オーストリアに隣接している地方で、イタリア語は、南部——イタリアに接している一つの州で、ロマンス語は、東部の山の中に住んでいるごく少数の人々によって、それぞれ使われていま

す。このように、スイスには一つの母国語というものがありませんので、国語教育も統一的なものは行なわれておりません。

第三の宗教問題も、スイスの教育を規定している大きな要因です。スイス人のほとんどはクリスチャンですが、少数の人々はユダヤ教を信じています。ただし、このユダヤ教は、スイスの教育にはほとんど影響をもっていないので、あまり問題になくてもよいでしょう。これに反して、キリスト教は大きな力を持っています。

ご存じのように、キリスト教には、カトリックとプロテスタントの二派があります。スイスでは、両派の教は、ほとんど同じですが、その分布のしかたは、いりまじっていて、とくにどの地方にかたまっているというわけではありません。比較的が多いということですが、カトリックはルーセン、ヘッセン、フライブルグ、バレーの各州に多く、プロテスタントはチューリッヒ、ベルン、ロザンヌ、ジュネーブの各州に多いと言えらるでしょう。

さて、いまから二十五年ばかり前、ジュネーブ湖の近く、つまりフランス語を日常語にしているプロテスタントの多い地方の Bond という村の小学校に、七歳の一人の少年が入学しました。その少年、つまりわたしは、それから十歳でその学校に通いました。この小学校には十六歳までとどまることが出来ます。また十二歳で高等小学校に行くこともあります。わたしのばあいは、十歳でとなりの村の中学校に進み、十六歳まで在学しました。十六歳からはギムナジウムに進んで、二年後、十八歳のとき大学にはいりました。

小学校では、読・書・算・宗教史・聖書・スイス史・スイス地理などを学びました。このうち、書——作文についてお話ししましょう。作文は毎週書かされました。宿題として出されたこともありま

す。ジュネーブ湖に泳ぎに行ったときとか、パーティーがあったときとかにも書かされました。やりかたは、先生から題目が出されて、それについて書き、その後その作文の批評を先生からお聞きしたり、ディスカッションしたりするという方法です。題目には、「ジュネーブ湖」とか「ドウ園」などがとりあげられました。一つしか題目が出されないばあいと、いくつか出されるばあいとがあります。いずれにしても題目は先生から与えられました。こうして、初等教育を終えるころには、たいいての者が正確に読み書きできるようになります。普通の人、たとえドウ園で働く人などは、この程度でよいわけです。ところが、もう少し知的なしごとをしようと思ふ人は、十二歳で高等小学校に行きます。

高等小学校では、もう一つの国語、たとえフランス語を日常語としている地方の人はドイツ語かイタリア語を、週三―四時間学習します。この学習の指導は、全科担任の先生がなさるわけですから、高度なことは望めません。ここではごく初歩的なことを学ぶわけです。一年たちますと、こんどはその国語を使っている地方に出かけ、一年間、実際に働きながら、耳と口でその国語を修得します。ここでちょっとつけ加えておきますが、ヨーロッパでは、日本やアメリカと違って、いろいろなことばを使う人々がいらまじっていることが多く、また外国へ旅行することも多いものですから、へたな外国語を使っても、それをはずかしがるようなことはありません。全然外国語を知らない人も、外国へ旅行しますが、そのばあいでも、できるだけその土地のことばを使って話をしようと思します。このへんに、スイス、広くはヨーロッパの言語学習の特色もあらうかと思

中等学校へは、十二歳のときにはいりません。中等学校は二つのセクションに分かれてします。第一のセクションは、実務につく人のためのコースで、エンジニア、技術者、高級商人、銀行家などになるための準備教育をいたします。第二のセクションは、それよりもつと知的なしごとをする人のためのコースで、教師、医者、学者、弁護士（国内法の弁護士と国際法の弁護士とがあります。）法律家などになろうとする人がはいります。この二つのセクションのもつとも大きな違いは、第一のセクションが近代語（外国語）と数学を重視するのに対して、第二のセクションでは外国語のほか、ギリシア語・ラテン語と、それらのことばが話されていた時のこと、つまり古代史を重視する点にあります。しかし、いずれにしても、中等学校の教育では、本や辞書でしらべればわかるような、単なる知識をつめこむことではなく、将来自分の周囲に起こるさまざまな

できごとをよく理解し、それに対処していける能力を養うことを重視しています。たとえば、簡単なことですが、星がどう動いているかとか、季節がどう移り変わっていくかとか、過去の人がどのように生きてきたかとかいったことを教えます。そのばあい、歴史にしても、単にどんなことが起こったかということではなく、人々がどのようにに生き、愛し、死んでいったかということを教えます。そうして、歴史は循環的にくりかえされるものだということを理解させ、今後どうしていくべきかを考えさせるわけです。ギリシア語やラテン語などの、いわゆる死語を教える必要があるかどうかということについては、いろいろ議論がありますが、わたしは必要だと思いません。ラテン語は、おそらく世界の言語の基礎となるものであり、ラテン語を学ぶことによって、言語の内部的なメカニズムを理解す

ることができるようです。とくにフランス語のばあいは、ラテン語を学ぶことによって、いっそう深く理解することが出来ます。文章をこまかく、深くみていくことも学べます。ともかく、中等学校では、単なる知識ではなく、思想とか考えることとかを重視しているわけです。こういう点から、中等学校では、まわりの人とどう接していくかということも教えます。これを「一歩めのシヴィライゼーション」とよんでいます。こうして、社会人として最低限度必要なシヴィライゼーションを中等学校では教えるわけです。

十六歳からは、二年間、ギムナジウムで学びます。ギムナジウムは、大学にはいるための準備教育を、その直接の目的にしています。大学については、世界中どこでも大差ないでしょう。大学教育の効果は、教授の實力と学生の能力・態度にかかっていると云えましょう。なお、スイスの大学はすべて国立で、宗教学校はありません。外国人留学生の多いことも、スイスの大学の特色でしょう。

以上、スイスの教育——言語教育について、そのあらましをお話してまいりましたが、いくらかの補足をしておきましょう。

まず、教材について。国語の教科書には、スイスの偉大な政治家の文章、スイスの文学、それに、フランス語を日常語としている地方ですと、フランスの文章などがとられます。ギリシアやローマの古典は、国語教材としてはとられません。もちろん、ギリシア・ローマの古典も学校で読みますが、そのばあいはすべて原語で読みます。韻歌などは使いません。一つ一つ辞典や参考書で調べて読んでいきます。それでもどうしてもわからないところはあります。と申しますのは、当時の文章、とくに法律などには、人々をおとしめるためのおとしあなのようなものがあるからです。しかし、わかるだ

けのことは自宅でしらべます。同様に古いフランス語も、なかなか理解しにくいところがあります。とくに、十六世紀、十七世紀のフランス語と今日のそれとは、そうとうちがっています。しかし、だからといって現代風に書き改めたりはいたしません。なお、国語教科書にフランスの文章がとられることをふしぎに思われるかもしれませんが、わたくしたちは自国と他国との区別をそれほどには思っておりません。どこの国も、世界の一部としてのヨーロッパに属していると考えております。教育は、ナショナルなものであるよりも、もつとユニバーサルなものであらうと考えます。

教科書は、小学校では、すべて国から支給されます。中等学校では、検定教科書を自費で購入いたします。

最後に、教育行政の面にふれておきたいと思います。小学校における学習指導のコントロールは、インスペクター（視学官）によっておこなわれます。視学官は、各学校をまわって歩いて、学習指導のしかたを指導します。中等学校では、スクール・マスターがいますが、これは学習指導面には干与しません。ここでは、学期末におこなわれる試験によって、間接的なコントロールをうけます。すなわち、期末試験の問題が政府から送られてきて、それを生徒にやらせるわけです。ですから、その試験により成績をとらせるためには、ある水準まで教えなくてはなりません。このことよって、ある種のコントロールがなされるわけです。もちろん、教師も、問題を作成して、たびたびテストをいたします。しかし、これは成績とは関係がありません。成績は、もっぱらこの国家試験によつてきまるわけです。大学は、もちろん自由であり、教授にまかせられています。

以上、国語教育とは少し話がそれたかもしれませんが、スイスの教育のあらましについてお話をいたしました。

付記 両氏のお話がきかれるようになったのは、奥田邦男君（現在、アメリカカ留学中）の尽力による。記して、感謝の意を表したい。
（野地潤家）